

學大科法學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷六第

行發日一月六年七正大

論說

生命保險業者ノ保健運動……………法學博士 財部 靜治

植民地統治ノ形式ニ就キテ(二)……………山本美越乃

分業ヲ論シテ福田博士ノ教ヲ請フ……………文學士 高田 保馬

所得稅ニ於テ所得ノ統一課稅ニ志……………法學博士 神戶 正雄

職工組合論……………法學士 海田 嗣郎

露國ノ新まりるくナ主義(二)……………朱田庄太郎

諾威ノ海運(二)……………法學士 小島昌太郎

時事問題

米價ノ調節……………法學博士 戸田 海市

雜錄

元祿年間貨幣改鑄ノ由來……………藤田 元春

戰費下ハ何ゾヤ……………法學士 小島昌太郎

赤穂ノ搦田(二)……………法學士 本庄榮治郎

赤穂ノ鹽田 (一)

本庄 榮治 郎

(一) 地域。一般ニ赤穂ト稱スルモノニハ東濱及ヒ西濱ノ別アリ。新濱、尾崎ノ両村ニ屬スル鹽田ヲ東濱トシ、赤穂町及ヒ鹽屋村ニ屬スルモノヲ西濱ト稱ス。而シテコノ兩濱ハ種々ノ點ニ於テ多少相違スル所アリ、例ヘハ東濱ハ殆ント鹽田ノミニシテ通常ノ田畑ハ僅カニ二反歩餘ニ過キサルニ反シ、西濱ニハ通常ノ田畑モ多少コレア

ルカ爲メ、住民ノ生業ニモ自ラ差異アルカ如キ、或ハ鹽田勞働者ノ種類及ヒ名稱、勞賃決定ノ方法、各種器具ノ名稱各異レルカ如キノ一例也。現今神戸專賣支局赤穂出張所ハ赤穂町ニアリ、新濱ニハ別ニ新濱派出所アリテ之ヲ管掌ス。余カ以下述ヘントスル所ノモノハ赤穂出張所ニ就キテ調査セル所ナルヲ以テ西濱ニ於ケル狀況ナリト知ル可シ。

(二) 採鹹及ヒ製鹽。鹽業ニハ採鹹ト製鹽トノ區別アリ、前者ハ鹽田ヲ使用シテ製鹽原料タル鹹水ヲ得ルノ操作ニシテ、後者ハコノ鹹水ヲ煎熬シテ鹽ヲ製造スルヲ云フ也。採鹹ニ關スル操作ハ之ヲ分チテ起シ濱、引濱、及ヒ持濱ノ二段トス。即チ雨後ソノ他停業ノ後ニ鹽田ヲ使用スル場合ニハ、ソノ始メニ於テ先ツ刀木鋏ヲ以テ鹽田面ニ固着セル作土ヲ搔起サザルベカラス(起シ濱)然ル後、馬鋏ニテ縱横斜ニ五回ノ引鋏ヲナシ柄振又ハ引板ニテ砂ヲ引キ均ラスモノニシテ(引濱)コノ準備作業終リタル後、翌日始メテ集砂ヲ行ヒ之ヲ沼井ニ持込ミ鹹水ヲ採取シ更ニ次回

探鹹ノタメニ撒砂ヲ行フモノナリ(持濱)。而シテ引キ續キ探鹹ヲナス場合ニハ起濱ノ操作ヲ要セス、引濱持濱ノ二段ヲ繰返スモノトス。

探鹹ヲナスニ當リ連日同一ノ鹽田ヲ使用スルヤ否ヤニヨリテ日持、替持、三ツ持ノ區別アリ。日持トハ同一ノ鹽田ニ毎日操作ヲ施シ日々探鹹スルモノ、替持トハ鹽田ヲ二區域ニ分チ隔日ニ探鹹スルモノ三ツ持トハ三區域ニ分チ三日毎ニ探鹹スルモノナリ。舊時赤穂ニ於テハ主トシテ日持ノ方法ニヨリシト雖、現今ハ大抵替持ニシテ三ツ持ノモノモ多少コレアリトイフ。蓋往時ニ於テハ労働者ノ供給割合ニ多ク、而モ鹽業ノ外ニ本業トシテ營ムヘキ生業ニ乏シカリシヲ以テ日持ノ方法ニヨリテ成ルヘク多クノ人力ヲ用フル必要アリシト雖、現時ニ於テハ事情一變シ労働者ハンノ數ヲ減シ且勞賃騰貴シタルヲ以テ成ルヘク人力ヲ減スルノ必要アリ。故ニ替持ノ方法ニヨリ鹽田使用面積ヲ小ニスル代リニ撒砂ノ量ヲ多クシ、ヨリテ以テ從前ト略同一量ノ探鹹ヲナシ得ヘキ方法ヲ探ルニ至リシモノニシ

テ、要スルニ前者ノ粗放的労働ヨリ後者ノ集約的ノ方法ニ進ミタルモノトイフコトヲ得ベシ。探鹹ノ時期ハ天候及ヒ生産制限擔價維持ノ必要上、十州鹽田會ノ規約トシテ舊曆三月ヨリ八月ヲ限ルコトトシタルモ、各地ニ於テ勵行セラレズ、赤穂ニ於テモ毎年三月中旬ヨリ十月マテ約八ヶ月間ヲ以テ探鹹ノ好期トナシタルモノノ如シ。然レトモ現今赤穂ニ於テハ天氣晴朗ノ場合ニハ終歲持濱ヲナスモノニシテ地勢上山岳ニ遠キト冬期西南風ノ吹ク關係ヨリ降霜アルモ直チニ解消シ積雪ヲ見ルコトナキヲ以テ冬期ニ於テモ探鹹ニ從事スルコトヲ得ト云フ。今明治三十九年乃至大正元年ノ七ケ年ヲ平均シタル探鹹日數及ヒ探鹹量ノ月別表ヲ示セハ左ノ如シ。

月次	探鹹日數	探鹹量 千分率
十月	二	〇
十一月	三	〇
十二月	四	〇
一月	五	〇
二月	六	〇
三月	七	〇
四月	八	〇
五月	九	〇
六月	一〇	〇
七月	一一	〇
八月	一二	〇
九月	一三	〇
計	一四	〇

即チ終歲持濱ヲナスモ最良最盛期ハ四・五・七・

八ノ四ヶ月ニシテ十一・十二ノ如キ持濱日數ハ割合ニ多キモノノ採鹹量少キハ天候ノ關係上良好ナル鹹水ヲ多量ニ得ル能ハサルニ因ル。

次ニ製鹽ハ鹽田ニ於テ採取シタル鹹水ヲ鹹水溜ニ引キ來リ釜屋ニ於テ鐵釜(現今石釜ヲ用フルモノナシ)ト石炭トニヨリテ之ヲ煮沸シ其水分ヲ蒸發セシメ、鹽ヲ結晶セシメ居出場ニ一晝夜冷シオキ苦汁ノ垂レ切リタル後、俵裝スルモノニシテ製鹽日數ハ年平均二百五十四日、ソノ最盛期ハ五・六・八・九ノ四ヶ月ニシテ、採鹹盛期ニ比シ一ヶ月ヲ後ルルハ蓋採鹹後ノ操作ニ屬スルヲ以テ也。

月次	製鹽日數	製鹽量 千分率	十月	元	壹
四月	三	金	十一月	三	壹
五月	六	二〇	十二月	九	七
六月	六	二二	一月	三	壹
七月	三	一〇〇	二月	五	六
八月	三	一四一	三月	三	壹
九月	元	一五	計	三三	一〇〇〇

(明治三十九年乃至大正元年ノ平均ニヨル)

(三)勞働關係。鹽田ノ營業主ヲ稱シテ俗ニ濱人ト稱シ、勞作ニ從事スル役夫ヲ濱子寄子トイヒ、

頭、上日傭、寄セ子、子供等アリ。頭ハ鹹水ノ濃淡分量ノ加減等スヘテ指圖ニ任スルモノニシテ上日傭ハ頭ヲ助ケテ引濱持濱等一切ノ勞務ニ服シ寄セ子、子供等ハ補助的勞務ヲナスモノ也。コノ外、釜焚アリ、目代リ(夜釜焚)アリテ鹹水ノ煎熬ニ從事ス。コレ等ノ勞働者ヲ雇傭スル年限ハ一ケ年ヲ限ルモノニシテ毎年十二月ニ於テ雇入雇繼及雇替等所謂「居リ究メ」ヲナスモノトス。ソノ勞賃ハ一般物價及ヒ勞賃等ヲ參酌シテ每年末鹽業組合ニ於テ決定セラルルモノナルガ、ソノ方法ハ頗ル複雑ニシテ時期及ヒ採鹹ノ方式ヲ異ニスルニ從ヒ、之ヲ異ニスルモノトス。而シテ舊來米一升ヲ貨幣一匁ニ宛テソノ賃銀ヲ以テ直チニ勞働者ヲ呼フノ名稱トナシタリ、例ヘハ日給一升四合ヲ得ル濱子ヲ呼フニ「一匁四分」ヲ以テスルカ如キ是レ也。コノ名稱ハ今尙赤穂舊式ノ鹽業ヲ營ム場合ニ存在セリ、今大正七年分勞賃支給率ヲ掲クレハ次ノ如シ。

(甲)採鹹勞賃

(一)赤穂式

式	改良	赤 穂 在 來 式				赤 穂 在 來 式			
		頭	上日備	中上日備	上日備	頭	上日備	中上日備	上日備
式	改良	採賊準備	採賊準備	採賊準備	採賊準備	採賊準備	採賊準備	採賊準備	採賊準備
頭	上日備	100	100	100	100	100	100	100	100
中上日備	上日備	100	100	100	100	100	100	100	100
一匁四分目備	一匁四分目備	100	100	100	100	100	100	100	100
一匁三分目備	一匁三分目備	100	100	100	100	100	100	100	100
一匁二分目備	一匁二分目備	100	100	100	100	100	100	100	100
一匁一分目備	一匁一分目備	100	100	100	100	100	100	100	100
一匁目備	一匁目備	100	100	100	100	100	100	100	100
上日備	上日備	100	100	100	100	100	100	100	100

(上日備以下ニ屬スルモノナシ)

備考一、以上ハスヘテ日給ナリ

- 二、頭ニハ兩式トモ以上ノ外月一圓宛ノ増金ヲ給ス
- 三、先貸金ハ十五圓以内ニシテ前半末ニ貸付其年中ニ全部返済セシムルモノトス
- 四、右勞賃ノ外、頭ニ對シテハ苦汁代(一荷五匁)加里代(年額五圓)水落料(年額一圓乃至二圓)ヲ支給スルコト從前ノ通りトス
- 五、右ノ外(鹽出賃、前給金、鹽鹽代、跡濱引賃、心付、酒代等)一切金品ヲ支給セス
- 六、白米價格ハ大阪毎日新聞所載神戸正米格付播州赤二ノ一圓高トシト日毎ニ變更組合ヨリ通知スルモノトス
- 七、赤穂在來式ハ採賊夫一人前十六穴ヲ受持テ改良亦襖式

雜 錄 赤穂ノ鹽田(一)

ハ二十六穴ヲ受持ツモノトス。凡ソ鹽田ニ於テ糶砂ヲ收容シ潮水ノ注加ニヨリ其鹽分ヲ流出シテ濃厚ナル鹹水ヲ得ルノ用ニ供セラルル沼井一臺ニ對シ一穴ヲ備フルモノナレハ、十六穴ハ沼井十六臺ヲ受持ツコトヲ示スモノナリ。

(二改良式(阪出流、鹿忍流))

○月給ノ部

扶持米	七八月	九 月	三、四、五、一、二、十一月
白米一ヶ月	一五圓	一〇圓	六、十月、十二月
三斗	一四圓	九圓	九圓
同	一四圓	九圓	八圓
			五圓

○日給ノ部

- 七 八 月 六 九 月 四 五 月 其 他 ノ 月
- 採賊準備 採賊準備 採賊準備 採賊準備
- 上日備 100 100 100 100
- 寄子 七 八 月、二 二 錢、其 他 ノ 月 一 八 錢
- 備考一、先貸金ハ十圓以内ニシテ前半末ニ貸付其年中ニ全部返済セシムルモノトス
- 二、本賃銀表ノ外ニ頭ニハ苦汁代加里代水落料ヲ支給ス
 - 三、採賊間斷ナク十日續キタルトキハ、濱子一人ニ付金四〇錢寄子一人ニ付金一五錢ヲ支給ス
 - 四、丸持ノトキハ其月ノ一日當賃金ノ七分増寄子ハ倍額ヲ支給ス
 - 五、右ノ外酒代心付等一切金品ヲ支給セス

第六卷 (第六號 一四七) 八九七

- 六、白米價格ハ赤穂式備考六ニ同シ
- 七、定雇員ハ三十二穴ニ對シ上日傭一人トシコノ上日傭一人ニ對シ寄子一人トス
- 八、改良式ハ替持ニテ一人前三十二穴トス

(乙)煎熬勞賃

釜焚	日	給	先賃金
	大釜	煎熬一日	油篝火代
中釜	煎熬一日	煎熬一夜	先賃金
小釜	煎熬一日	煎熬一夜	先賃金
代目	六二五元	一	一〇〇〇

備考一、先賃金ハ前年末ニ貸付其年中ニ全部返済セシムルモノ

ト六

二、本表ノ外商給金手當金扶持米鹽出貨鹽仕舞賃鹽代酒代藥代夜食代等一切金品ヲ支給セズ

三、本表煎熬勞銀ハ大正七年十二月二十六日ヨリ實施セリ

右ノ勞賃ハ米價及一般物價ヲ基礎トスルモノナルカ故ニ他ノ工業労働者ノ場合トハンノ趣ヲ異ニシ、物價ト勞賃トハ相平行スルノ傾向頗ル大ナルモノアリトイハサル可ラス。尤労働者ハ大抵ハ現米ヲ以テ之ヲ受クルニ非スシテ換算セル代金ヲ得ルモノナリ。而シテ鹽賠償價格ハ必スシモ一般物價ト伴フモノニアラサルヲ以テ營業主ハ物價騰貴ノ際ニハ物價ノミナラス更ニ勞

賃ノ騰貴ヲモ引受クルコトトナリ、殊ニ昨年來ノ如キ燃料石炭ノ暴騰セル場合ニアリテハンノ困難頗ル大ナルモノアリトイフ。